

大学に対する満足感の規定因に関する研究

—日本人学生と留学生の比較—

The Factor Determining the Contentment with One's Own University

— The Comparison between Japanese Students and Foreign Students —

荒井 真太郎*

広沢 俊宗**

Shintaro ARAI

Toshimune HIROSAWA

抄 録

大学生が大学に対してどう考えており、どう満足感を抱くかということは、今日の大学のあり方を考えるうえで必要な視点である。そこで大学に対する満足感の規定因を検討するため、日本人学生452名と外国人留学生54名を対象に、「大学に対する満足感」、「大学教育および学生生活に対する満足感」、「学生生活における相談相手」に関する調査を行った。

その結果、日本人学生においては「人間関係」、「教育内容」に対する満足感や相談相手の有無が大学に対する満足感を規定する大きな要因であることが明らかになった一方、留学生においては、もっぱら「教育内容」に対する満足感が大きな要因であることが明らかになった。これは大学のあり方を考えるうえでも意義のある視点と言えよう。

1. 問 題

大学進学率が上昇する中、大学教育のあり方や学力低下の問題等が近年取りざたされている。これらに関する大学のあり方についての議論において、大学教育を一つのサービスであると考え、学生の視点からの大学のあり方を見直すというアプローチが一つの柱になっている。従って、現代の大学生がいかに大学を見ており、どう感じているのかということは重要なポイントであると言えよう。

従来から、日本の各大学においては学生生活に関するアンケート調査が行われており、大学教育などのソフト面や施設などのハード面についての学生からの評価のデータが蓄積されている。それらのデータによって、大学のあり方の改善が方向付けられてきたのであるが、本稿では、大学におけるソフト面、ハード面について数多くある評価項目の相互関連等を分析すること、さらに、日本人学生と外国人留学生からの評価について比較検討を行うことにより、大学のあり方を議論するうえで意義のある視点を呈示することを目的とする。

単独の大学による調査以外に、日本私立大学連盟(2000)による学生の大学に対する意識調査では、「入学後の所属学部・学科」、「教育内容・方法」、「施設・サービス」、「学生生活全般」等について広

* 関西国際大学人間学部

** 関西国際大学経営学部

範にわたって詳細なデータを示している。また、ベネッセコーポレーション文教総研(1998)の行った高校生と大学生に対する調査では、学生の70%が入学前と入学後のイメージにギャップを感じており、学生の大学に対する満足度のうち、大学教育に関する学生の評価は低く、大学の授業内容、教え方には問題が多いことが示唆されている。

上記のような調査報告により詳細なデータは収集されているが、学生にとって、大学や大学生生活における細かな領域に対しては不満であっても全体としては満足であるという場合があるろうし、逆に、全体の中では小さな一領域に過ぎないことであっても、そのことに関して不満であるがために大学全体、学生生活全般に対して不満であるという場合もあることを考慮しなければならない。つまり、大学全般に対する満足感の規定する要因が何かという視点から検討することが必要であると考えられる。このように、学生が大学や大学生生活の中で満足感の規定する要因となる領域を明らかにすることを本稿の第一の目的とする。

また、満足感の持ち方ということには、大学生個人内の要因が関わっていることを考慮する必要がある。本稿では、日本人学生と同じ大学に通い、同じ大学生生活を送る外国人留学生在がどのように満足感を持つかということを中心にしながら、両者を比較することによって、満足感に関わる大学生個人の文化差という要因を明らかにすることを試みる。そこで、一つの大学に所属する日本人学生と外国人留学生について、両者の大学に対する満足感のあり方を比較検討することを第二の目的とする。

近年アジア系留学生在が増加している中で、留学生に関する研究として従来心理学の分野では、ソーシャル・サポートに関する調査がなされている。留学生の適応とソーシャル・サポートの関連を検討した研究では、概ね両者の関連を肯定する結果が見られるとされる(田中, 1998)。サポートを受ける領域についての研究として、周(1994, 1995)によると、在日中国系留学生においては、学習領域におけるサポートや指導的サポートについては必要性を高く感じている一方、情緒領域におけるサポートの必要性をそれほど高く感じていないという報告がなされている。また、水野・石隈(2000, 2001)によれば、学習面、情緒面ともに求めるサポートの強さについてはそれほど差がないながらも、留学生自身がサポートを受けてきたと知覚している量に関しては、学習面においての方が大きいという結果が示唆されている。このように、留学生の学生生活においては、学習面と情緒面でのサポートの必要性や知覚されたサポートの量が異なっている可能性があり、それに伴う満足感の持ち方についても学習面、情緒面では異なることが予想される。留学生の大学への満足感を理解する上で、学習面、情緒面などの領域の持つ意味が異なるということを仮説として考える。このことは日本人学生の満足感と比較する上でも重要であると考えられる。さらに、ソーシャル・サポートに関連して、学生生活における相談相手のあり方に着目し、そのあり方と大学への満足感との関連について日本人学生と留学生の違いを検討することを本研究の第三の目的とする。

2. 方 法

調査時期：2001年11月

調査対象：4年生私立大学経営学部の大学生506名。内訳は日本人大学生の1年生から4年生の452

名。外国人（アジア系）留学生の1年生から4年生の54名。

調査項目：①大学に対する満足感—大学生生活全般の満足度を問う項目として「この大学に入学できてよかったと思う」（項目1）、「大学生活が充実している」（項目2）、「この大学が好きである」（項目3）の3項目を作成し、それぞれ、「よくあてはまる」（5点）～「全くあてはまらない」（1点）の5件法で回答を求めた。

②大学教育および学生生活に対する満足感—大学教育の内容、学生生活における人間関係、教職員の態度、学内施設、スクールバス等の領域に関する25項目について「満足」（5点）、「ある程度満足」（4点）、「どちらともいえない」（3点）、「やや不満」（2点）、「不満」（1点）の5件法で回答を求めた。（項目については表3参照。）

③相談相手の選択—「家族関係のこと」、「友人関係や異性関係のこと」、「自分の性格や健康上のこと」、「成績や所属学部・学科のこと」、「クラブ活動や生活上のこと」、「学費などの経済上のこと」、「就職・進学など進路のこと」、の7つの局面について誰に相談するかという形式で回答を求めた。相談相手については、「学内の友人や知人」、「学外の友人や知人」、「家族や親戚」、「大学の教職員」、「誰にも相談しない」、の5つの回答の中から1つを選択する方式である。

調査の実施：学生生活実態調査の項目の一部として大学の授業時間において集団方式で実施した。

3. 結果

① 大学に対する満足感について

大学に対する満足感に関する3項目について、Pearsonの積率相関係数によって相互相関を検討したところ、表1のように.66～.71の範囲となっており、互いに高い正の相関があることが確認されたため、これらの3項目の合計点を大学に対する満足感得点とした。

表1 大学に対する満足感項目の相関係数

	項目1	項目2
項目2	.71	
項目3	.73	.66

日本人学生と留学生の大学に対する満足感得点の平均値と標準偏差を表2に示す。t検定を行った結果、有意に留学生群の方が高い得点であることが認められた { $t(504) = -4.47$ $p < .001$ }。

表2 大学に対する満足感の平均値（標準偏差）

	日本人学生	留学生	t値
大学に対する満足感	8.10 (3.09)	10.07 (2.97)	-4.47 ***

*** $p < .001$

② 大学教育および学生生活に対する満足感について

大学教育および学生生活に対する満足感に関する25項目について、日本人学生、留学生ごとに平均値と標準偏差を算出した（表3）。

t検定を行ったところ、25項目中の19項目で両群に有意差が認められた。有意水準に、 $p < .05 \sim .001$

の差が見られたものの、いずれの項目についても留学生群の得点の方が高いという結果であった。

表3 大学教育および学生生活に対する満足感項目の平均値（標準偏差）

項目内容	日本人学生	留学	T 値
専門的な知識や技術の習得	2.87 (.95)	3.39 (1.09)	- 3.75 ***
一般的な教養の習得	3.05 (.95)	3.44 (1.02)	- 2.90 **
語学力の養成	2.79 (.96)	3.46 (.95)	- 4.86 ***
表現力の養成	3.07 (1.00)	3.39 (.90)	- 2.25 *
資格の取得	2.85 (1.06)	3.26 (.81)	- 2.72 **
友人との出会い	3.55 (1.22)	3.31 (1.08)	1.37
先生との出会い	3.16 (1.06)	3.54 (1.02)	- 2.50 *
職業への理解	2.86 (.99)	3.20 (.94)	- 2.42 *
幅広い視野の獲得	2.84 (1.02)	3.30 (1.06)	- 3.01 **
授業のわかりやすさ	2.77 (.92)	3.31 (.99)	- 4.09 ***
カリキュラムの内容	2.69 (.95)	3.26 (.88)	- 4.19 ***
クラブ中心課外活動	2.69 (1.15)	3.02 (1.02)	- 2.02 *
家族の支援・理解	3.29 (1.06)	3.85 (1.12)	- 3.68 ***
本学の学生の態度	2.53 (1.02)	3.00 (1.17)	- 3.15 **
大学の教職員の対応	2.78 (1.03)	3.63 (1.00)	- 5.74 ***
学生食堂のサービス中心対応	3.48 (1.14)	3.59 (1.11)	- .71
学生食堂の値段	2.93 (1.21)	3.15 (1.14)	- 1.28
学生食堂のメニュー	2.97 (1.19)	3.30 (1.09)	- 1.92
学生食堂の味	3.35 (1.10)	3.26 (1.10)	.59
売店のサービス・対応	3.54 (1.10)	3.76 (.93)	- 1.42
売店の品揃え	2.74 (1.14)	3.30 (1.02)	- 3.43 **
売店の値段	2.81 (1.15)	3.20 (1.03)	- 2.38 *
スクールバスの乗務員の対応	3.01 (1.06)	3.52 (1.08)	- 3.33 **
スクールバスのダイヤ（時間・便数）	2.20 (1.06)	2.91 (1.28)	- 4.51 ***
スクールバスの区間	2.55 (1.14)	3.36 (1.08)	- 4.91 ***

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

大学教育および学生生活に関する満足感 25 項目の相関マトリックスから Scree test により最終的に因子数を 5 と決定し、主成分法による因子分析を行い Varimax 回転後の因子負荷量を示したのが表 4 である。これらの累積分散寄与率は 60.9% で、回転後の因子負荷量の絶対値が .40 以上の項目は、第 I 因子で 9 項目、第 II 因子で 7 項目、第 III 因子で 3 項目、第 IV 因子で 3 項目、第 V 因子で 3 項目である。第 I 因子は、「語学力の養成」(.73)、「職業への理解」(.73)、「専門的な知識や技術の習得」(.72)、「一般的な教養の習得」(.71)、「幅広い視野の獲得」(.70)、「表現力の養成」(.69)、「カリキュラムの内容」(.69)、「授業のわかりやすさ」(.58)、「資格の取得」(.57)といった項目に高く負荷していることから、「教育内容」因子と命名する。同様にして、第 II 因子は、「学生食堂のメニュー」(.81)、「学生食堂の味」(.78)、「学生食堂のサービス・対応」(.77)、「売店のサービス・対応」(.76)、「売店の値段」(.73)、「学生食堂の値段」(.72)、「売店の品揃え」(.67)より、「食堂・売店の充実

表4 大学教育および学生生活に対する満足感 25 項目の varimax 回転後の因子負荷量 (N = 506)

項目内容	F1	F2	F3	F4	F5	共通性
語学力の養成	.73	.17	-.11	.30	.06	.67
職業への理解	.73	.09	.25	-.03	.13	.61
専門的な知識や技術の習得	.72	.10	.08	.26	.06	.61
一般的な教養の習得	.71	.15	.06	.32	.00	.63
幅広い視野の獲得	.70	.11	.36	-.05	.11	.64
表現力の養成	.69	.12	.25	-.03	.04	.56
カリキュラムの内容	.69	.16	.05	.34	.10	.63
授業のわかりやすさ	.58	.10	.13	.43	.11	.55
資格の取得	.57	.09	.23	.02	.17	.42
学生食堂のメニュー	.11	.81	.09	.04	.17	.71
学生食堂の味	.08	.78	.13	.17	.01	.66
学生食堂のサービス・対応	.06	.77	.21	.12	-.00	.66
売店のサービス・対応	.13	.76	.10	.11	-.04	.62
売店の値段	.23	.73	-.02	.07	.27	.66
学生食堂の値段	.08	.72	.19	.02	.15	.59
売店の品揃え	.23	.67	-.13	.00	.27	.59
友人との出会い	.19	.14	.77	.05	-.03	.66
先生との出会い	.31	.13	.70	.17	.12	.65
家族の支援・理解	.17	.11	.51	.37	.05	.44
クラブ・課外活動	.28	.21	.32	.22	.20	.31
本学の学生の態度	.23	.07	.14	.75	.07	.64
大学の教職員の対応	.36	.20	.22	.64	.22	.68
スクールバスのダイヤ (時間・便数)	.18	.12	.03	.06	.85	.77
スクールバスの区間	.14	.23	.07	.15	.81	.75
スクールバスの乗務員の対応	.05	.34	.17	.41	.44	.50
固有値	8.41	2.99	1.46	1.30	1.05	
寄与率	19.2	17.6	8.12	8.03	7.84	
累積寄与率	19.2	36.9	45.0	53.0	60.9	

度」因子, 第三因子は, 「友人との出会い」(.77), 「先生との出会い」(.70), 「家族の支援・理解」(.51) より, 「人間関係」因子, 第四因子は, 「本学の学生の態度」(.75), 「大学の教職員の対応」(.64), 「スクールバスの乗務員の対応」(.41) より, 「学生・教職員の態度」因子, 第五因子は, 「スクールバスのダイヤ」(.85), 「スクールバスの区間」(.81), 「スクールバスの乗務員の対応」(.44) より, 「スクールバス」因子と命名された。

5つの因子のそれぞれに関して0.4以上の負荷量を示した項目を下位項目とした。教育内容因子に関しては9項目, 食堂・売店の充実度因子に関しては7項目, 人間関係因子に関しては3項目, 学生・教職員の態度因子に関しては3項目, スクールバス因子に関しては3項目について, 項目得点を合計し, それぞれの項目数で除した得点を大学教育・学生生活に対する満足感の下位項目得点とした。5

大学に対する満足感の規定因に関する研究

つの下位項目得点に関して Pearson の積率相関係数によって相互相関を検討した (表 5)。0.6 以上の高い相関を示したのは「学生・教職員の態度」と「スクールバス」の下位項目得点間であった。

表 5 下位項目間の相関係数

	教育内容	食堂・売店の充実度	人間関係	学生・教職員の態度
食堂・売店の充実度	.35			
人間関係	.52	.32		
学生・教職員の態度	.55	.44	.48	
スクールバス	.38	.46	.29	.63

5 つの下位項目得点に関して、日本人学生、留学生別に平均値と標準偏差を算出した (表 6)。

表 6 大学教育および学生生活に対する満足感の下位項目得点の平均値 (標準偏差)

下位項目	日本人学生	留学生	t 値
教育内容	2.87 (.72)	3.35 (.65)	- 4.63 ***
食堂・売店の充実度	3.12 (.90)	3.37 (.79)	- 1.93
人間関係	3.33 (.84)	3.57 (.88)	- 1.94
学生・教職員の態度	2.78 (.73)	3.37 (.76)	- 5.55 ***
スクールバス	2.37 (.99)	3.14 (1.06)	- 5.30 ***

*** p < .001

t 検定を行った結果、「教育内容」、「学生・教職員の態度」、「スクールバス」に関して有意に留学生群の方が高い得点であることが認められた {t(504)=- 4.63 p < .001 ; t(504)=- 5.55 p < .001 ; t (504) =- 5.30 p < .001}。

日本人学生と留学生について、大学に対する満足感の規定因を確認するため、5 つの下位項目を独立変数とし、大学に対する満足感得点を目的変数として重回帰分析を行った (表 7)。

表 7 大学に対する満足感得点を目的変数とした重回帰分析

要 因	日本人学生	留学生
教育内容	.25 ***	.57 ***
食堂・売店の充実度	.08	.00
人間関係	.31 ***	.13
学生・教職員の態度	.04	.05
スクールバス	.10 *	.18
R ² 乗説明率	.35 ***	.56 ***

* p < .05 *** p < .001

その結果、日本人学生、留学生ともに重回帰分析の説明率 (R² 乗) はいずれも有意 (p < .001) であり、日本人学生は 35%、留学生は 56% で投入した独立変数によって目的変数を説明できることが示された。日本人学生に関しては、「人間関係」(p < .001)、「教育内容」(p < .001)、「スクール

大学に対する満足感の規定因に関する研究

バス」(p < .05) に対する満足感が、大学に対する満足感に有意な正の関連を示した。「人間関係」と「教育内容」の標準偏回帰係数は同程度であるが、「人間関係」に対する満足感が特に重要であることが示唆された。留学生に関しては、「教育内容」(p < .001)に対する満足度のみが有意に大学に対する満足感との関連を示した。

表8 学生生活における相談相手(出身別)

家族関係のこと						χ^2 乗値
	誰にも相談 しない	大学の教 員・職員	家族・親戚	学外の友 人・知人	学内の友 人・知人	
日本人学生	203	3	80	88	74	20.12 ***
留学生	17	0	22	4	7	
合計	220	3	102	92	81	
友人・異性関係のこと						χ^2 乗値
	誰にも相談 しない	大学の教 員・職員	家族・親戚	学外の友 人・知人	学内の友 人・知人	
日本人学生	88	4	19	177	161	1.46
留学生	13	0	2	18	18	
合計	101	4	21	195	179	
自分の性格・健康のこと						χ^2 乗値
	誰にも相談 しない	大学の教 員・職員	家族・親戚	学外の友 人・知人	学内の友 人・知人	
日本人学生	114	11	127	93	104	3.84
留学生	11	3	18	8	10	
合計	125	14	145	101	114	
成績や所属学部・学科のこと						χ^2 乗値
	誰にも相談 しない	大学の教 員・職員	家族・親戚	学外の友 人・知人	学内の友 人・知人	
日本人学生	119	48	75	47	160	28.15 ***
留学生	8	19	7	4	13	
合計	127	67	82	51	173	
クラブ・生活のこと						χ^2 乗値
	誰にも相談 しない	大学の教 員・職員	家族・親戚	学外の友 人・知人	学内の友 人・知人	
日本人学生	164	6	64	71	144	8.66
留学生	18	3	8	3	18	
合計	182	9	72	74	162	
経済上のこと						χ^2 乗値
	誰にも相談 しない	大学の教 員・職員	家族・親戚	学外の友 人・知人	学内の友 人・知人	
日本人学生	113	11	269	25	31	17.53 **
留学生	13	7	24	3	4	
合計	126	18	293	28	35	
進路のこと						χ^2 乗値
	誰にも相談 しない	大学の教 員・職員	家族・親戚	学外の友 人・知人	学内の友 人・知人	
日本人学生	97	62	149	64	76	12.62 *
留学生	11	15	12	2	10	
合計	108	77	161	66	86	

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

③相談相手の選択について

相談内容による相談相手のあり方に関して、日本人学生群と留学生群の比較を行ったところ、次の領域の相談内容で有意な群間差が認められた(表8)。すなわち、「家族関係」($\chi^2 = 20.12$, $df = 4$, $p < .001$), 「成績や所属学部」($\chi^2 = 28.15$, $df = 4$, $p < .001$), 「学費など経済上のこと」($\chi^2 = 17.53$, $df = 4$, $p < .01$), 「進路」($\chi^2 = 12.62$, $df = 4$, $p < .05$)の各領域である。領域によって、相談相手のあり方が日本人学生と留学生とはかなり異なっていることが示された。

日本人学生群と留学生群別に、大学に対する満足感得点と相談相手のあり方の関連を検討するため、相談相手を1要因とする分散分析を行った(表9, 10)。

表9 日本人学生の相談相手による大学に対する満足感の平均(標準偏差)

家族関係のこと					F 値
誰にも相談 しない	大学の教 員・職員	家族・親戚	学外の友 人・知人	学内の友 人・知人	9.55 ***
7.34 (3.17)	11.33 (3.21)	9.24 (2.58)	7.94 (2.81)	9.15 (2.94)	
友人・異性関係のこと					F 値
誰にも相談 しない	大学の教 員・職員	家族・親戚	学外の友 人・知人	学内の友 人・知人	4.71 **
7.21 (3.35)	11.25 (4.50)	8.05 (2.51)	7.97 (2.94)	8.72 (2.95)	
自分の性格・健康のこと					F 値
誰にも相談 しない	大学の教 員・職員	家族・親戚	学外の友 人・知人	学内の友 人・知人	4.75 **
7.38 (3.31)	9.64 (2.77)	8.37 (2.89)	7.68 (2.98)	8.88 (2.92)	
成績や所属学部・学科のこと					F 値
誰にも相談 しない	大学の教 員・職員	家族・親戚	学外の友 人・知人	学内の友 人・知人	5.17 ***
7.18 (3.44)	8.69 (2.91)	8.45 (2.66)	7.57 (3.12)	8.66 (2.84)	
クラブ・生活のこと					F 値
誰にも相談 しない	大学の教 員・職員	家族・親戚	学外の友 人・知人	学内の友 人・知人	8.84 ***
7.28 (3.17)	9.50 (3.51)	9.03 (2.68)	7.45 (2.87)	8.96 (2.88)	
経済上のこと					F 値
誰にも相談 しない	大学の教 員・職員	家族・親戚	学外の友 人・知人	学内の友 人・知人	2.25
7.55 (3.48)	7.91 (3.42)	8.43 (2.86)	7.24 (3.18)	8.32 (2.83)	
進路のこと					F 値
誰にも相談 しない	大学の教 員・職員	家族・親戚	学外の友 人・知人	学内の友 人・知人	6.81 ***
6.98 (3.16)	9.10 (2.92)	8.50 (2.77)	7.52 (3.26)	8.56 (3.07)	

*** $p < .001$ ** $p < .01$

日本人学生の大学に対する満足度得点では、相談内容に関する7つの領域のうち、「経済上のこと」を除く6領域で相談相手の主効果が有意であった。それぞれ、「家族関係」{ $F(4,443) = 9.55$ $p < .001$ }, 「友人・異性関係」{ $F(4,443) = 4.71$ $p < .01$ }, 「自分の性格・健康」{ $F(4,443) = 4.75$ $p < .01$ }, 「成績や所属学部・学科」{ $F(4,443) = 5.17$ $p < .001$ }, 「クラブ・生活上のこと」{ $F(4,443) = 8.84$ $p < .001$ }, 「進路のこと」{ $F(4,443) = 6.81$ $p < .001$ }の領域である。日本人学生においては、大

大学に対する満足感の規定因に関する研究

表 10 留学生の相談相手による大学に対する満足感の平均（標準偏差）

家族関係のこと					F 値
誰にも相談 しない 8. 94 (3. 40)	大学の教 員・職員	家族・親戚 10. 59 (2. 44)	学外の友 人・知人 8.25 (3.59)	学内の友 人・知人 11. 71 (2. 06)	2.44
友人・異性関係のこと					F 値
誰にも相談 しない 10. 15 (2. 85)	大学の教 員・職員	家族・親戚 7. 50 (2. 12)	学外の友 人・知人 9.72 (2.42)	学内の友 人・知人 10. 33 (3. 40)	.60
自分の性格・健康のこと					F 値
誰にも相談 しない 10. 27 (3. 29)	大学の教 員・職員 12. 00 (2. 00)	家族・親戚 9. 61 (2. 79)	学外の友 人・知人 8. 75 (3. 82)	学内の友 人・知人 10. 80 (2. 57)	.97
成績や所属学部・学科のこと					F 値
誰にも相談 しない 9. 13 (2. 90)	大学の教 員・職員 10. 58 (2. 82)	家族・親戚 9.00 (1. 63)	学外の友 人・知人 10. 00 (2. 94)	学内の友 人・知人 10. 15 (3. 78)	55
クラブ・生活のこと					F 値
誰にも相談 しない 9. 78 (2. 96)	大学の教 員・職員 13. 00 (1. 00)	家族・親戚 8.13 (2. 70)	学外の友 人・知人 8.00 (2. 00)	学内の友 人・知人 10. 89 (2. 89)	2.63 *
経済上のこと					F 値
誰にも相談 しない 9. 23 (3. 24)	大学の教 員・職員 10. 43 (3. 95)	家族・親戚 10. 08 (2. 69)	学外の友 人・知人 9. 33 (2. 52)	学内の友 人・知人 11. 50 (2. 38)	.54
進路のこと					F 値
誰にも相談 しない 8. 82 (3. 19)	大学の教 員・職員 11. 60 (2. 20)	家族・親戚 8. 83 (3. 01)	学外の友 人・知人 11. 00 (2.83)	学内の友 人・知人 9. 90 (3. 07)	2.24

* p < .05

表 11 日本人学生の大学に対する満足感得点の下位検定

家族関係	「誰にも相談しない」群, 「学外の友人・知人に相談」群 < 「大学の教員・職員に相談」群 p < .05
友人・異性関係	「誰にも相談しない」群, 「学外の友人・知人に相談」群, 「家族・親戚に相談」群 < 「大学の教員・職員に相談」群 p < .05
自分の性格・健康	「誰にも相談しない」群, 「学外の友人・知人に相談」群 < 「大学の教員・職員に相談」群 p < .05
成績や所属学部・学科	「誰にも相談しない」群 < 「学内の友人・知人に相談」群, 「大学の教員・職員に相談」群 p < .05
クラブ・生活上のこと	「誰にも相談しない」群, 「学外の友人・知人に相談」群 < 「学内の友人・知人に相談」群, 「家族・親戚に相談」群, 「大学の教員・職員に相談」群 p < .05
進路のこと	「誰にも相談しない」群 < 「家族・親戚に相談」群, 「学内の友人・知人に相談」群, 「大学の教員・職員に相談」群 p < .05
	「学外の友人・知人に相談」群 < 「大学の教員・職員に相談」群 p < .05

表 12 外国人留学生の大学に対する満足感得点の下位検定

クラブ・生活上のこと	「学外の友人・知人に相談」群, 「家族・親戚に相談」群 < 「大学の教員・職員に相談」群 $p < .05$
------------	--

学に対する満足感が、相談相手のあり方によって異なる傾向が顕著である結果であった。一方、留学生群では、大学に対する満足感の得点で相談内容の7領域のうち「クラブ活動や生活」{ $F(3,46) = 2.63$ $p < .05$ }の領域でのみ相談相手の主効果が認められた。

以上の有意差の認められた領域に関して、TukeyのHSD法により多重比較を行った結果を表11, 12に示す。これらの結果は、特に日本人学生の場合に、相談相手のあり方が大学に対する満足感と顕著に関連していることを示唆するものであった。

4. 考 察

①大学や大学生生活の満足感とその規定要因となる領域について

日本人学生と留学生の大学に対する満足感得点の平均値を比較した結果、留学生群の方が高い得点であった。さらに、大学教育および学生生活に対する満足感に関しても25項目のうち19項目で留学生群の得点の方が高いという結果であった。同じ大学・学部に通う学生でありながら満足感がこのように異なることには、様々な要因が考えられる。気質の違いや立場の違い、今回の調査対象がアジア系留学生であることなども関わっている可能性がある。

大学教育および学生生活に関する満足感25項目の因子分析からは、「教育内容」因子、「食堂・売店の充実度」因子、「人間関係」因子、「学生・教職員の態度」因子、「スクールバス」因子の5因子を抽出した。それらの因子に高い負荷量を示した項目から下位項目得点を算出したが、これらの得点に関しても日本人学生と留学生を比較したところ、「教育内容」得点、「学生・教職員の態度」得点、「スクールバス」得点で留学生の方が満足感の高い結果になった。このため、留学生の方が単に満足感を感じやすいというのではなく、「教育内容」、「学生・教職員の態度」、「スクールバス」の領域で日本人学生の満足感が低くなる傾向が、日本人の平均値のあり方からは読み取れる。

大学に対する満足感の規定要因を確認するため重回帰分析を行った結果、日本人学生は、第一に「人間関係」が大学に対する満足感を規定している要因であり、「教育内容」得点もその次に大きく規定する要因となっていることが明らかになった。一方の留学生に関しては、「教育内容」得点のみが突出して大学に対する満足感を規定する要因となっており、しかも、留学生にとっては「教育内容」の与える影響が日本人学生よりも高いと言えそうである。日本人学生にとっては、「教育内容」よりもむしろ「人間関係」の方が、満足感を規定する傾向があるので、ここに日本人学生と留学生との文化差が表れていると考えられる。従って、日本人学生については、教育内容や授業のカリキュラムのみならず、友人、教職員、家族などの人間関係のあり方が、大学や学生生活に満足することに大きく関わっていることに考慮する必要がある。一方の留学生については、もっぱら教育内容の充実が大学に

対して満足することの鍵を握っていると言えよう。

②相談相手の選択との関連

相談内容による相談相手の選択に関して、日本人学生群と留学生群の比較を行ったところ、「家族関係のこと」、「成績や所属学部・学科のこと」、「経済上のこと」、「進路のこと」などの領域で、相談相手の選択が日本人学生と留学生とで異なっていることが示された。さらに、日本人学生群と留学生群別に、大学に対する満足感得点と相談相手の選択の関連を検討するため、相談相手を1要因とする分散分析を行った結果は、日本人学生については、6領域での相談相手の選択が大学に対する満足感と関わっていることを示していた。特に大学の教職員を相談相手として選択する場合に大学に対する満足感も高いという傾向が明らかになった。その一方で、留学生については、1領域でのみ相談相手の選択が大学に対する満足感に関わっており、その場合やはり教職員を相談相手に選択することが高い満足感に関わっていた。これらの結果から、日本人学生は、大学の教職員を相談相手として選択する場合に大学に対する満足度が高くなる傾向が顕著であると言える。この結果は、①において、日本人学生の大学に対する満足感の規定因として、「人間関係」が大きな位置を占めていることとも整合性のあるものである。留学生に関してはサンプル数の少なさという問題のために、日本人学生と同様の結果が生じなかった可能性があるが、少なくとも今回の結果では日本人学生ほど相談相手による大学に対する満足感の差が顕著ではなかった。

③今後の展望

今回の調査結果により、大学に対する満足感の内容を細分化するだけでなく、その構造を捉えることができた点、また、日本人学生と留学生を比較することにより、満足感を持つ大学生個人の要因を検討できた点に意義があると言える。留学生のように、教育内容が満足感に大きく影響する場合には、大学教育における制度的な問題や技術的な問題をより細かく検討すべきであるし、日本人学生のように友人や教職員との人間関係が大きく影響する場合には、制度的な問題のみに注意を向けずに、対人交流の場を大学内でいかに展開するかということをもさらに検討してゆくことが必要であろう。

引用文献

- 1) ベネッセコーポレーション文教総研(編)：『大学満足度と大学教育の問題点 大学生高校生を対象とした調査より』、ベネッセコーポレーション 1998
- 2) 日本私立大学連盟(編)：『ユニバーサル化時代の私立大学(学生生活白書)』、開成出版 2000
- 3) 水野治久、石隈利紀：「アジア系留学生の専門ヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的変数の関連」『教育心理学研究』、48巻2号 2000 165-173頁
- 4) 水野治久、石隈利紀：「アジア系留学生の専門的ヘルパー、役割的ヘルパー、ボランティアヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的変数の関連」『教育心理学研究』、49巻2号 2001 137-145
- 5) 周玉慧：「在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートの次元 -必要とするサポート、知

大学に対する満足感の規定因に関する研究

覚されたサポート，実行されたサポートの関係-」『社会心理学研究』，9巻 1994 105-113

6)周玉慧：「受け取ったサポートと適応に関する因果モデルの検討 -在日中国系留学生を対象として-」『心理学研究』，66巻 1995 33-40

7)田中共子：「在日留学生の異文化適応：ソーシャルサポート・ネットワーク研究の視点から」『教育心理学年報』，37集 1998 143-152頁

付記：この論文のデータの一部は，日本心理学会第66回大会の発表時に使用した。

Abstract

It is a viewpoint necessary for considering the way that should be of today's university how the students feel the contentment with one's own university. The questionnaires for "the contentment with one's own university", "the contentment with university education and the life as a student", and "the consultation partner in a student life", were administered to 452 Japanese students and 54 foreign students, in order to examine the factors that determined the contentment with their own university. The results were as follows; in Japanese students, "human relationship", and "the existence of consultation partners" were the most important factors which determined the contentment with their own university. In foreign students, "the contents of the university education" was the most important factor. This will be meaningful in considering the way that should be of today's university.